

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載
 【部門区分】第 3 部門第 1 区分
 【発行日】平成 29 年 9 月 7 日 (2017.9.7)

【公表番号】特表 2013-542160 (P2013-542160A)
 【公表日】平成 25 年 11 月 21 日 (2013.11.21)
 【年通号数】公開・登録公報 2013-063
 【出願番号】特願 2013-528514 (P2013-528514)
 【国際特許分類】

C 0 1 G 23/047 (2006.01)

B 0 1 J 2/04 (2006.01)

C 0 1 G 23/053 (2006.01)

【F I】

C 0 1 G 23/047

B 0 1 J 2/04

C 0 1 G 23/053

【誤訳訂正書】

【提出日】平成 29 年 7 月 25 日 (2017.7.25)

【誤訳訂正 1】

【訂正対象書類名】特許請求の範囲

【訂正対象項目名】全文

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【特許請求の範囲】

【請求項 1】

少なくとも 99.0 重量 % の TiO_2 含有量を有し、かつ

- 60 ~ 350 μm の範囲の粒子サイズ d_{50}
- 最大 120 μm の範囲の狭い粒度分布 (B90 / 10)
- 1 ~ 30 nm の範囲の細孔直径
- 少なくとも 0.1 cm^3 / g の細孔容積
- 30 ~ 300 m^2 / g (BET) の表面積

を有する、粒子の形態の多孔性球形二酸化チタンの製造プロセスであって、

少なくとも 250 m^2 / g の表面積を有する二酸化チタンを 1 ~ 50 重量 % 含有する水性懸濁液を、噴霧塔に導入するステップ；

ここで、独立して分離された / 独立した、即ち「隣接する滴」と接触しない、前記懸濁液の滴が、700 ~ 1200 μm のサイズで前記噴霧塔に導入されて乾燥されるように、前記懸濁液の運搬速度、ノズル形状、噴霧ドライヤの温度及び空気速度を選択し、そして、

ここで使用する、前記少なくとも 250 m^2 / g の表面積を有する二酸化チタンは、10 OH 基 / nm^2 超の多数の遊離ヒドロキシル基を、懸濁粒子の表面に有する、

および、得られた TiO_2 噴霧粒をか焼するステップ；を含む、
 粒子の形態の多孔性球形二酸化チタンの製造プロセス。

【請求項 2】

粒子の形態の多孔性球形二酸化チタンが 60 ~ 250 μm の範囲の粒子サイズ d_{50} を有する、請求項 1 に記載の粒子の形態の多孔性球形二酸化チタンの製造プロセス。

【請求項 3】

粒子の形態の多孔性球形二酸化チタンが 60 ~ 150 μm の範囲の粒子サイズ d_{50} を有する、請求項 1 に記載の粒子の形態の多孔性球形二酸化チタンの製造プロセス。

【請求項 4】

粒子の形態の多孔性球形二酸化チタンが $80 \sim 120 \mu\text{m}$ の範囲の粒子サイズ d_{50} を有する、請求項 1 に記載の粒子の形態の多孔性球形二酸化チタンの製造プロセス。

【請求項 5】

粒子の形態の多孔性球形二酸化チタンが $1 \sim 20 \text{nm}$ の範囲の細孔直径を有する、請求項 1 ～ 4 のいずれかに記載の粒子の形態の多孔性球形二酸化チタンの製造プロセス。

【請求項 6】

粒子の形態の多孔性球形二酸化チタンが $4 \sim 20 \text{nm}$ の範囲の細孔直径を有する、請求項 1 ～ 4 のいずれかに記載の粒子の形態の多孔性球形二酸化チタンの製造プロセス。

【請求項 7】

前記噴霧ドライヤは、噴水状の構成で動作する、請求項 1 ～ 6 のいずれかに記載の粒子の形態の多孔性球形二酸化チタンの製造プロセス。

【請求項 8】

ここで使用する、前記少なくとも $250 \text{m}^2/\text{g}$ の表面積を有する二酸化チタンは、 $200 \text{OH基}/\text{nm}^2$ 超の多数の遊離ヒドロキシル基を、懸濁粒子の表面に有する、請求項 1 ～ 7 のいずれかに記載の粒子の形態の多孔性球形二酸化チタンの製造プロセス。

【誤訳訂正 2】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0044

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0044】

HT 処理 (HT 1 及び HT 2) の後にそれぞれ得られた懸濁液を、沈降後の水性上澄液に基づいて視覚的に評価した。両者の場合において、粒子の非常に速やかな沈降の後、透き通った、最も上質の、粒子を含まない上澄液が見られた。通常は、まさに最小限の微粒子成分によってさえ乳濁した上澄液がもたらされるので、これらの研究は、本発明による材料が、極めて厳しい水熱条件下で、水性及びプロトン性媒体中において化学的及び物理的に安定であることを証明している。これらの特性のおかげで、本発明による材料は粒子の破損又は表面の再水和の傾向を有さないため、多相系における担体材料として極めて適切である。従って、これによって粒子の塊の形成が防止され、粒子の送達の流れが影響されないままとなる。